

■研究・実践の課題（テーマ）

展望と実践力を持つ栄養教諭のためのワークショッププログラムの構築

■主任研究者 足立己幸

■共同研究者 上原正子、安達内美子

■研究・実践の目的、方法、結果、考察や提案等の概要

1) 目的

2010-2012年度までの3年間に行った「栄養教諭を学習者としたワークショップ」（研究所主催）では、栄養教諭の資質の向上のためには、活動の目的や目標を明確にし、それに見合った方法や評価のための集団討議の場が効果的であり、継続参加した者はこうした進め方を他の仲間に発信し、リーダーシップをとる資質を得ることができていることがわかってきた。栄養教諭は学校における子どもたちの食育の専門家であり、学校全体の食育をコーディネートする役割を担っていることから、栄養教諭の資質を高めることは、子どもたちが食を通して心身の健康や環境との関わりについて学ぶことができる環境を具現化することに直接貢献でき、地域に開いた生涯をとおした食育に大きな意義をもつことになる。3年間のワークショップから栄養教諭は、食育のめざす方向を確認しつつ、日常業務に具体化する力の補強が必要と考えた。3年間で行ってきた給食管理や栄養管理・栄養指導を基礎として、それらを具体的に発信できる力を補強する必要がある。そこで、今年度の目的は栄養教諭が「伝えたいことを考える力」「発信する力」を養うことができるワークショッププログラム案を作成し、その効果を検証することとした。

2) 方法

- ①栄養教諭が日常的に紙媒体として発信している「食育だより等」や教員の理解を得る機会としての「現職教育」の場面、また様々な「研修会等」でのプレゼンテーションをテーマとするワークショッププログラムを立案した。教諭としての専門的な支援が必要な内容について、本研究者が講義し、個別に研修支援を行った。また必要に応じて、小中学校の校長や教育委員会指導主事に講義を依頼した。
- ②参加した栄養教諭が日常的に作成し、活用しているプログラムを持ち寄り、学習児童等の目的を確認した上で、実践可能なものか、栄養教諭に必要な資質に対応したものかどうかを把握するための、ワークショップを開催した。（3回）
- ③ワークショップで得られた栄養教諭への効果を検証・再考し、「栄養教諭のためのワークショッププログラム」（仮称）を作成した。

3) 結果

「名古屋学芸大学健康・栄養研究所公開セミナー 栄養教諭レベルアップのためのワークショップ 2015—それぞれの食育活動をまとめ・共有・発信する力をつける—」を実施し、13名（内1名は2回、1名は1回）が3回のワークショップに参加し、その前後に研究者が個別相談をした。

第1回『食育だより』で伝えたいことを考え、作成する」では、伝える目的を明確にする手段として評価枠をグループで検討した。「自校の児童生徒の実態を捉えた内容が入っているか」等、9つの評価枠をもとに全ての学習者が自らの「食育だより」を修正することができた。

第2回は「『現職教育研究会』（仮称）で伝えたいことをまとめ、プレゼンテーションに活かす」とし、3つのグループで検討し、まとめ、発表することができた。「現職教育研究会」に参加している学習者は4名であり、他の学習者は「職員会」の場面を想定した。具体的に短いプレゼンテーション用のパワーポイント等の教材を作成し、発表した。「伝え方」として場面や内容、手段の異なる2つの事例が示された。共通して、伝えたい内容の吟味が最重要であることが確認された。

第3回は「食育について実践したこと、伝えたいことをまとめプレゼンテーションとして組み立てる」として、持参したパワーポイントをグループで組み立て直し、実際の場面を想定したロールプレイにより発表した。学習者は「情報を共有・発信する質を高めるための工夫」がされていないことや、評価の方法を予め定めていないことに気づき、ワークショップ終了後、全ての学習者から修正したパワーポイントの提出があった。事業終了後のアンケートでは、修正したパワーポイントを使って県給食大会での発表や市の栄養士会の研修資料、所属校職員会資料として活用したものが4名、28年度試食会等、今後活用する計画があるものは6名あった。

終了後の研修レポートから、3回に継続して実施したワークショッププログラムにより、栄養教諭が日常的に行っている「伝えていく・発信していく」具体的な活動について、客観的に見直し、自らの活動目的・内容・教材作成等の評価方法を具体的に検討する上で、効果的であり、とりわけ、持ち寄り教材・資料を共有する集団討議が効果的であることが示された。今回実施したプログラムは栄養教諭の資質を高めることができる効果的なものであると考えられる。

#### 4) 考察

ワークショップのテーマである「伝えたいことを考える・発信する力」は、新任者からベテラン栄養教諭まで、各自が抱える課題として共通していた。今回取り上げた課題以外にも、多数の学習者（学校関係者・子ども・保護者・地域住民等）と共に進める共食試食会や職員会、研究会で直接伝える機会が多い職性であるが故に基本的な能力として求められていることも再確認された。本ワークショップ（評価枠組みを含めて）の活用マニュアル（冊子等）を作成し、関係者と共有し、展望と実践力を持つ栄養教諭のネットワークづくりへ活用する必要性と可能性が明らかになった。